

## 大学生の学校生活享受感に対する サークル等所属の影響

池田 満\*

### The Effect of the Belongingness to College Student's Clubs on Students' College Life Enjoyment

Mitsuru IKEDA\*

Students' dropout is a serious problem in the recent Japanese colleges and the institutional effort to promote students' college adjustment is strongly demanding. Recent studies have suggested that belonging to extra-curricular activities (i.e., "clubs") predicts the higher school adjustment because it provides the support network to the students. The present study investigated the effect of the belongingness to clubs on students' adjustment to colleges. The results of the survey conducted to 115 college students indicated that satisfaction with college life could be predicted by belongingness to clubs.

**key words:** college students, college student's clubs, college adjustment, school dropout

#### 問 題

大学教育に関わる課題として退学者問題が深刻化している。文部科学省等の各種調査から推計すると大学生の10人に1人は入学後4年以内に退学しており、解決が急務となっている(船戸, 2007)。そのため大学生の不登校や退学の原因を探り、解決や予防的取り組みを開発、実施することを旨とする研究が盛んに行われている。

近年の動向として、学習面の困難(学習技術や学習に対する動機、レディネスの不足)や対人関係上の問題などに起因するアパシー状態から大学生活へ不適応となり、不登校や退学に至るケースが増加していることが指摘されている(内田, 2011など)。すでに就学前教育や対人関係スキルの向上を目的とした心理教育を試みる大学もあり、学習・対人関係の知識やスキル獲得の面での成果が示されつつある(及川・坂本, 2008)。実際の学生の適応促進のためには、こうした教育的取り組みに加え、獲得したスキルを元に学内で対人関係を持つことができる場を提供することも有効であろう。

こうした対人関係づくりの場として本研究では、学内で

活動するサークルに注目する。大学生にとってサークル等の課外活動は学業について重要な営みであり(山田, 2004)対人関係スキルの向上や、学習・生活に関わる道具的・情緒的サポート源として機能している(新井・松井, 2003)。また不登校問題に端を発する「居場所」研究から、大学生は「居場所」として家族以外の人と過ごす場所を挙げる割合が高く、その場所の具体例にサークルを挙げる傾向が強いこと(中村, 2008)、さらに友人と過ごす場を「居場所」として持つ大学生の精神的健康が高いこと(杉本・庄司, 2006)が指摘されている。

そこで本研究では、「サークル等活動への所属が学生の適応感を促進する」という仮説を検証することを目的とする。また学生にとって最も重要な活動である学業における有能感が適応に与える影響についても探索的に分析する。

#### 方 法

##### 調査回答者と調査方法

首都圏の私立大学2校で心理学関連の講義を受講している大学生115名(女性57名, 男性57名, 無回答1名)を対象に質問紙調査を実施した。回答者の平均年齢は20.1歳( $SD=1.16$ )であった。

##### 質問紙

サークル, 部活動, 同好会などを含めた大学内を拠点とする課外活動への所属とともに, 以下の尺度を用いて調査した。①学校生活の楽しさ: 学校生活享受感尺度(古市・玉木, 1994)。本尺度は大久保(2005)により大学生を対象とした調査において妥当性が確認されている。②生活全般に対する満足感: Huebner(1991)が作成した Students' Life Satisfaction Scale を吉武(2010)が翻訳した生活満足度尺度。③学業に対する有能感: Marsh(1990)が作成した青年から成人の自己概念を測定する尺度の一部を角谷(2005)が翻訳した「学業コンピテンス尺度」。

#### 結 果

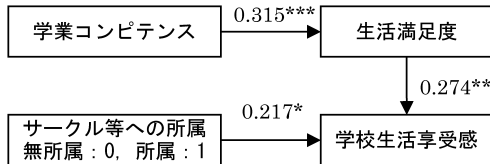
回答者のうちサークル等活動へ所属している者は47名, 無所属の者は67名であった。生活満足度, 学校生活享受感および学業コンピテンスについてサークル等活動への所属の有無による差を検討したところ, 学校生活享受感についてのみサークルに所属している回答者の平均値が有意に高かった(Table 1:  $t(112)=2.18, p=.031, d=.341$ )。次に, 学業コンピテンスとサークル等活動への所属が適応に及ぼす影響についてパス解析を行ったところ, Figure 1 に示すモデルで高い適合度が得られた( $\chi^2(3)=3.35, p=.316; CFI=.972$ )。このモデルから, サークル所属している学生は学校生活享受感が高いこと(直接効果=.271)という結果が得られた。また学業コンピテンスの高さは, 学校生活享受感に対して, 生活満足を媒介とした間接的影響を及ぼして

\* 国際基督教大学教育研究所

Institute of Educational Research & Services, International Christian University, 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585, Japan  
e-mail: manchan@purple.plala.or.jp

Table 1 サークル所属の有無による各適応感の比較

	サークル等活動への所属				t(112)	p	d
	所属 (n=47)		無所属 (n=67)				
	M	SD	M	SD			
学業コンピテンス	3.09	1.06	3.15	0.89	0.33	0.739	0.06
生活満足度	2.73	0.64	2.82	0.77	0.65	0.520	0.13
学校生活享受感	3.33	0.66	3.02	0.80	2.18	0.031	0.34



$\chi^2(3, N = 11) = 3.354, p = .316; CFI = .972$

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

Figure 1 適応感に対するサークル等所属と学業コンピテンスの影響

いることが示された (間接効果 = .09)。

### 考 察

本調査からサークル等に所属している学生は無所属の学生と比較して、より学校生活を楽しんでいることが明らかとなった。一方で大学生活への楽しさに対して学業に対する有能感はポジティブに働いていたが、その影響は日常生活に対する満足感を媒介とした間接的なものであった。学業有能感が大学生活に対する楽しさの感覚に直接効果を持たなかった理由として、価値観の多様化により近年の学生の中に大学生活において必ずしも学業を相対的に重視していない者が増加していること (大久保, 2005) の影響が挙げられる。学業を重視していない学生にとって、学業における有能感は生活全般的な満足度に対してポジティブな影響を持つものの、必ずしも大学生活の楽しさを直接的に規定するものではなかった可能性が考えられる。しかし学業有能感の源となる客観的な学業成績の不振は、進級・留年など大学での学業継続と密接に関わっていることは明白であり、学業面での有能感や適応感が大学生にどのような影響を及ぼすのか、更なる検討が必要であろう。

本研究から、大学生の大学適応を促進し不登校や退学を予防する上で学生のサークル等活動への関与を高める取り組みの効果が示唆された。本研究の結果を踏まえ具体的な組織的方略を考える上で、サークルの特性による影響 (活動の内容や規模など)、学生の特性による影響 (居住形態やパーソナリティ特性、サークル活動への関与度など) を

多角的に検討し、サークルへの所属が学生の適応感を高める過程をさらに詳細に明らかにすることが必要であろう。

### 引用文献

- 新井洋輔・松井 豊 2003 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向 筑波心理学研究, 26, 95-105.
- 船戸高樹 2007 深刻化する退学者問題: 全学的な取り組みが求められる (上) 教育学術新聞 第 2279 号
- 古市裕一・玉木弘之 1994 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.
- Huebner, E. S. 1991 Initial development of the Students' Life Satisfaction Scale. *School Psychology International*, 12, 231-243.
- Marsh, H. W. 1990 The structure of academic self-concept: The Marsh/Shavelson model. *Journal of Educational Psychology*, 82(4) 623-636.
- 中村聡市郎 2008 大学生における「居場所」と精神的健康に関する一研究: 居場所の心理的機能の観点から 創価大学大学院紀要, 30, 309-358.
- 及川 恵・坂本真士 2008 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ: 授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討 京都大学高等教育研究, 14, 145-156.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因: 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 杉本希映・庄司一子 2006 大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連: 過去の「居場所環境」の認知と比較を中心に 共生教育学研究, 1, 37-47.
- 角谷詩織 2005 部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか: 学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから 発達心理学研究, 16, 26-35.
- 内田千代子 2011 大学における休・退学, 留年学生に関する調査第 31 報 第 32 回全国大学メンタルヘルス研究会 報告書
- 山田剛史 2004 現代大学生における自己形成とアイデンティティ: 日常的活動とその文脈の観点から 教育心理学研究, 52, 402-413.
- 吉武尚美 2010 中学生の生活満足度に関連するポジティブ・イベント: イベントの項目収集と相互影響関係の検討 教育心理学研究, 58, 140-150.

(受稿: 2013.5.23; 受理: 2013.10.28)